町長対談 その2 歴史学者

フロンティア精神で関東を大改造

徳川家康のブレーン、先見性のある伊奈忠次公から学ぶ未来とは

“伊奈流”を貫き、町民に寄り添う官僚役人

町長　今、町では忠次を顕彰するための様々な取り組みを進めているところですが、先生が忠次に関心を持ったきっかけは何だったのでしょうか？

大石　江戸幕府の第8代将軍徳川吉宗の政治を追いかけていた時ですね。その時代、政治を動かしていたのは大岡越前守などのいわゆる改革派官僚ですが、彼らは堤防を造り河川敷を開発して税金の対象となる地を拡大するなど、どんどん年貢を上げていった。国庫は潤うのですが、川が一度、決壊してしまうと飢饉や一揆が起こってしまう。

反対に、伊奈氏が行ったのは河川をあえて氾濫させ、水が引くのを待つ。そして河川敷を肥沃にする“伊奈流”です。さらに、無理に増税はせず、安定して年貢を取っていくという長いスパンで生産と生活を考える方法でした。成果を急ぐ改革派からすると、忠次は困った存在と疎まれましたが、農民からすると安定した農政で、地域に根づいていきました。そこが非常に興味深かったのです。

町長　先生のおっしゃる通り、忠次は農民にとても支持されていましたね。豊作の時も凶作の時も平均して年貢をとることで、農民に“預金”ができるようにしたのが忠次の方式で、農民はとても助かったようです。忠次から代々、受け継がれている民衆に寄り添った行政を、伊奈町の首長としてぜひ見習いたいと常々思っているところです。

大石　「寄り添う」というのはキーワードになると思います。教科書などでは、ともすると勇ましい戦いをしたり、新しいことを始めた人物に焦点を当てがちですが、忠次は表に出るタイプではなかった。目立つ人の穴埋めをして、社会の底上げをしていくという役割を上手に果たす人でした。派手な活躍をする人の後ろで、「民衆のために、弱者のために何が大事か」を考える、冷静でバランスのとれた人でしたね。

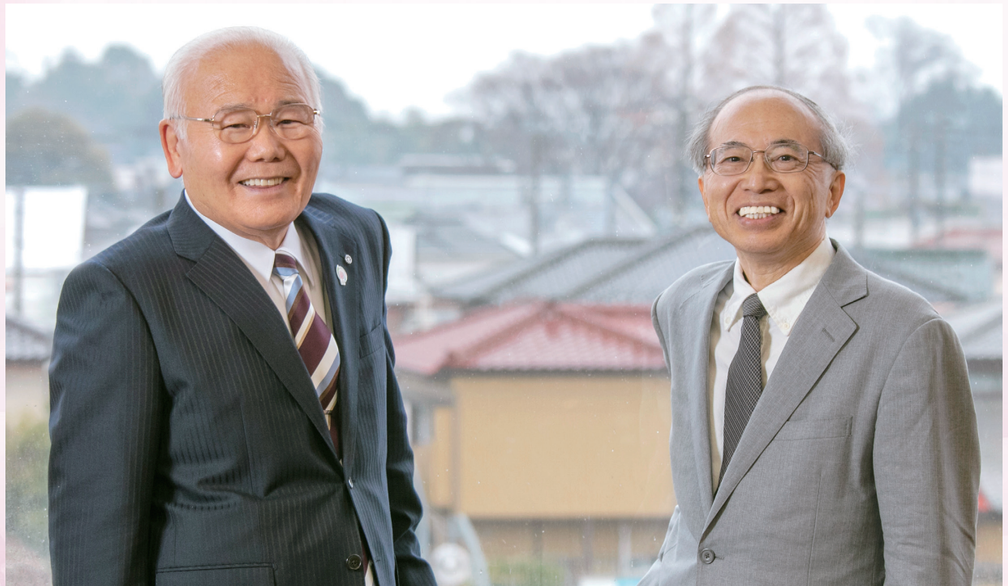
インフラ整備をはじめ、幕府を下支えする地味な仕事を行ってきた忠次ですが、インフラの大切さや「自然との共生」が叫ばれている現代社会にこそ、光の当たるべき人だと思います。

農民に慕われる明るい未来を描く政治家

伊奈町長 **大島清** Oshima Kiyoshi

対談

東京学芸大学名誉教授 **大石学** Oishi Manabu



関東を大改造し、大都市江戸の礎を築く

町長　先生、それから忠次の先見性も素晴らしいですね。当時、湿地帯だった関東へ赴くことに不安を抱えていた家康に、「関東には魅力がある。川さえ解決できれば、関東は一大穀倉地帯になる」と説得したのが忠次でした。

大石　そうです。家康も忠次に全幅の信頼を寄せていた。東海から関東に来る時、「関東を我がものとして支配せよ」と忠次に伝えている。つまり、家康は関東の支配を全部、忠次に任せたんです。まさに、忠次は家康の分身だったと言えるでしょう。その信頼に応えるべく、忠次は江戸湾に流れていた利根川を銚子に流すことで、それまで湿地帯だった旧流域を新田に変えた。さらに治水も行い、江戸は発展の基盤を得ました。

彼は、まさに現在の首都・東京の原型を作ったのです。

町長　人力で利根川を東遷するなんて、すごいことですね。

大石　忠次はグランドデザインを描ける人でした。江戸が発展していくためには物資が必要で、その物流ルートを確保するために利根川を遷（うつ）し、関東を大改造したわけです。街道筋を整備し、新田開発や寺社・旗本などへの土地の割り当ても彼が手がけた。関東平野の大構造転換を図った。つまり、フロンティア開発という大仕事を成し遂げたんです。

町長　わかりやすくいうと、今でいう農林水産大臣と国土交通大臣を兼務していたわけですね。

大石　この難事業を、彼はやってのけたことから、民衆からも慕われた。

町長　おっしゃる通りで、平民からは、「神様仏様伊奈様」といわれていました。

大石　そうです。江戸中期になり、一揆が起こると、幕府は伊奈氏の子孫を“派遣”する。すると一揆は収まってしまう。それほど、民衆からの信頼が厚かったのは、冒頭でも触れた通り、忠次が民衆に寄り添っていたからだと思います。

江戸というグランドデザインを構築

今再び、歴史を刻むコントロールタワーに

大石　ここ、伊奈町は関東全域を整備して新しい都市・江戸を作るための拠点であると同時に、伊奈家代々の領地でした。なぜ、忠次がこの地を選んだのかを考えた時、一つには小室宿が当時、市（いち）なども立って経済発展していたことが挙げられます。また、北方大名への軍事的な備えにも有効でした。さらに、新田開発の際、利根川や鬼怒川などの水脈も重要でした。いずれにせよ、このような歴史は他市がお金を出しても買えない、伊奈町の貴重な財産です。

町長　おっしゃる通りです。忠次が選んだ地に恥じぬよう、魅力的な町にするために、さまざまな取り組みを始めているところです。

大石　伊奈氏がこの地をベースキャンプ兼コントロールタワーとして、関東一帯を大改造したのと同様に、東京から人が流出し、情報が拡散する昨今、伊奈町は再度コントロールタワーになりえると思います。

今、時代は新しいフェーズに入っています。その中で、どのように新たなネットワークや地域を構想するかという、課題が見えてきました。現代の忠次が求められているのではないでしょうか。

町長　そうですね。現代のコントロールタワーとなるべく、まずは子どもたちに「伊奈忠次公が住んでいた町」という誇りを持ち、次代も魅力ある伊奈町を築いてもらえるよう、しっかりと忠次の功績を伝えていきたいですね。

おおいしまなぶ プロフィール

東京都出身。東京学芸大学名誉教授。江戸時代を専門とする日本近世史学者。NHK大河ドラマ「新撰組！」「篤姫」「龍馬伝」などの時代考証を担当。2009年には時代考証学会を設立。会長を務める。